Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

出来事と創発の時間 ： ミードの時間論から

木村，純

(Citation)
社会の時間 ： 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:68-79

(Issue Date)
2022-06-30

(Resource Type)
research report

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009412

第 6 章　出来事と創発の時間
ミードの時間論から

木村純

第 1 節　はじめに

本章の課題は、時間という観点から社会を考察する際に、G. H. ミードの時間論から何を引き継ぎ、どのように発展させることができるかということにある。とはいえ、社会学の教科書的な知識では、ミードは自己論の文脈で語られるのみで、時間について重要な研究を残した人物であることは、あまり紹介されていないように思われる。たとえミードの時間論の存在が知られていても、自己論や社会的役割理論などが前面に押し出された結果、彼の時間論は、社会心理学的業績を補完するものとしてしか読まれていないことも多い。

しかし、それはミードその人の研究が、哲学、倫理、社会、心理、教育、社会改良や社会運動にとどまらず、物理現象や生物・生命現象などの自然科学にまで及び、多岐にわたっていることにも関係しているだろう。また、学生が書き留めた講義録や講義のための手稿が死後に出版されたものが著書とされるか、生前に発表された論文集があるのみで、自身の手による公刊著書がなく、文献上の問題があることもミードの研究の輪郭をぼかしてしまう要因にもなっていると考えられる。

ここでは、ミードが残した研究の全体像を明らかにすることはできないが、時間論を始めるにあたって取り上げられた命題を集中的に検討することで、ミードの研究の奥行きを示すと同時に、本章の課題にこたえていきたい。ここで取り上げる命題は「reality exists in a present」［Mead (1932)1980: 1］というもので、1930 年に行われたケイラス連続講義のための草稿と、この講義に関連すると思われる遺稿・論文で補われ、ミードの没後に出版された『現在の哲学』で取り上げられたものである。この命題を時々の論文や講義録あるいはミード研究者の論文などで補いながら、その時間論の一端を明らかにする。

第 2 節　ミード時間論の主題が意味するところ “reality exists in a present”

先にも述べたように、『現在の哲学』のもととなったケイラス連続講義 [1)]の主題を、「reality exists in a present」という命題のうちに見出すことができると、ミードは述べている。このフレーズは、「リアリティは現在に存在する」［近藤 1990: 113］、「リアリティは現在のうちに存在する」［山下 1997: 46］あるいは「リアリティは現在に在る」［入江 1999: 103］と訳され、引用されている [2)]。ミードの時間論が展開される講義のこの命題は、引用者たちによって重要なフレーズとして参照されているのではあるが、しかし、如何にも奇妙なフレーズであるように思われる。そこでは、「時間」やそのひとつの様態である「現在」が正面から論じられるのではなく、リアリティの現れる場としての現在の性質について言及されているだけであり、すぐに意味を理解することが困難なフレーズである。なぜなら、「現実は現在

に在る」や「実在は現在に存在する」と訳せば、トートロジーであるような印象を与えるものになってしまうフレーズであり、意味を見出すことが困難である。

そこで、このテクストを離れて、別のテクストで似通った表現を探してみると、この連続講義前年の 1929 年に発表された「過去の性質」のなかに同じような表現で、「諸出来事は、過去や未来に属するのではなく、現在に属するだろう」［Mead (1929)1964: 345＝2003: 145］という文章を見つけることができる。しかし、これではミードが単なる現在中心主義で時間論を組み立てた人物であるようにも見えてくる。しかし、そうではない。というのも、ミードが語る現在のうちにあるという過去は、特有の性質をもっており、ある種の実在性を有しているからである[3)]。

たとえば、「われわれの現在を越えるものごとが経験において存在しているということが、まさにここで議論している過去というものである」、つまり「過去とは、現在から溢れ出た流れである」［Mead (1929)1964: 348＝2003: 150］。そして、そのような過去は、現在を条件づける時間様態である。それゆえに、「この条件付けこそが、単なる推移から区別された過去の質的な性格である」［Mead (1929)1964: 346＝2003: 147］とミードによって言われるのである。では、現在とも過去とも違う時間様態としての未来はどのようにとらえられるのだろうか。簡単に言ってしまえば、未来は過去や現在に条件づけられている。とはいえ、現在が過去に条件づけられていたのとは異なり、これから出現する未来は「仮説的性格を帯び」［Mead (1929)1964: 351＝2003: 154］ざるを得ない。というのも、未来は不確定なものであり、確実性を確保することができないからである。また、われわれが過去や未来について言及するとき、過去や未来は「観念の領域」つまり「精神のうちに」［Mead (1932)1980: 24＝2018: 637］あるため、ミードによってリアリティのないものとされることを考え合わせれば、未来の二重の「ありえなさ」が際立っている。

このように、現在はミードによって特殊な位置を与えられているのではあるが、ここではひとまず棚上げにして、現在のうちに存在する「reality」について考察を進めていく。

第 3 節　reality　事実性／現実性／実在性

reality という言葉もまた、多義的な言葉である。ミードは real とともにこの言葉を多用している。ただし、言葉の意味を文脈に合わせて読み込んでいくと、過去のリアル／リアリティが問われているときでも、「真の過去」と解せる場合もあれば、「実在としての過去」と読むほうが文脈的に正しいと思われる場合もあり、その意味は一様ではないことがわかる。たとえば、ミードの批判対象としての哲学的な立場が、過去のリアリティを「不変的で変更不能な秩序（immutable and irrevocable order）」［Mead (1929)1964: 343］と表現するときは、後者の例にあてはまる。もちろん、ふたつの意味が両立している場合もある。科学や歴史学についてミードが言及している場合は、このふたつの側面から議論しているように思われる。

他方で、創発的出来事としてのひとつの現在が語られるときには、現実性や主観的な意味での現実味というような観点が含まれる言葉としての意味合いが強くなる。「われわれが真

理を見出したのは、意味が存在に与える実質や存在が意味に与えるリアリティにおいてである」［Mead (1929)1964: 337-8］などが、その例であろう。このように多義的であるために、「reality exits in a present」を引用する際に採られる方法としては、無理に翻訳するのではなく、「リアリティ」とカタカナで表記されることが多い（本章でも、これ以降は、アルファベット表記によって原語を強調する場合以外は、「リアリティ」「リアル」と表記する）。

リアリティの意味について哲学の伝統から考察を加えておくと、哲学の意味では、reality は res（物）に由来するもので、res に連なるラテン語 realitas は「事象内容」を意味するもので、「実在」の意味はカント以前にはなかったとされる。また、この言葉は観念性（ideality）の反対概念であり、認識論的概念である。しかし、「実在」という意味に解されるならば、それは res（物）の意味に近い存在論的概念として理解されていることになり、その点では二義的な内容をもつ言葉であると言える。入不二基義［2020］は、「現実性」と訳される reality と actuality というふたつの哲学用語の相違や共通点について論じるなかで、reality の意味には「〈事象〉性」と「〈内容〉性」があると述べている。要約すると、〈事象〉性とは、「もの・こと」のことで、〈内容〉性とは、「もの・ことの内容」のことである。つまり、本章との関連する言葉で解釈しておくと、リアリティには、実在的レベルと本質内容的レベルのふたつの水準があるということである。加えて、この本質内容的レベルは、「現実味がある」と言われる場合で使用されるリアリティの意味も含まれる。

ミードは、哲学の薫陶を受けているので、res に連なる言葉であることも十分理解していたと思われる。このことについては、加藤一己による解説でも述べられている。加藤によれば、哲学からキャリアをスタートさせたミードにとって、リアリティとは「直接経験」を指すものであった［加藤 2003: 264-5］。それはヘーゲルの弁証法をプラグマティズムによって読み換えるなかで考え出されたもので、ヘーゲルがリアリティを永遠不変のものへと最終的に接続させてしまうことへの批判でもあった。ミードは、リアリティは直接経験するものであると捉え返し、そのことによってリアリティを現実世界へと引き戻したのである。前項までの話を総合すれば、永遠不変の世界には、新しい問題は生じないが、「この現に存在する直接経験の世界は、…（中略）…絶えず新たな問題が生じる世界だからだ」［加藤 2003: 265］。

このことに関連して、ミードは現在から過去や未来が無限に延長されることで得られる「形而上学的リアリティ」［Mead (1932)1980: 32＝2018: 645］の絶対性によって、逆に現在が極小化され、「取るに足りない要素にまで縮小」［Mead (1932)1980: 32］されることへの危惧を示している。ここでの形而上学的なリアリティとは、点としての現在が繋がれたものとして絶対的な時間が連続しているようなものとして理解されることであり、それはミンコフスキーの四次元時空の静止した世界観にも言えることであった。

第 4 節　exist　現れ出でて在る

先にみたように、exist は「存在する／ある」と訳される。語源的にみれば、この動詞はラ

テン語に由来する言葉で、「ex（外へ）」と「sist（立つ）」に分解することができる。つまり、「存在する／ある」という意味だけでなく、「現れる」という意味合いももっており、この二点を重視すれば「現れ出でて在る」という動詞であると見なすことができる。語源にまで立ち入って exist の意味について述べたのは、ミードの時間論にとって、「存在する」と「現れる」というふたつの観点から考えることが重要であるからだ。

ミードは「切っ先のような現在（knife-edge present）は存在しない」［Mead (1925)1964: 289］と述べているが、独立した点のような瞬時も、それらが個別の点で並んでいくような時間も実際的なものではないと考えている。そのような切っ先としての、あるいは点として連続するような時間は、「新しいもの（the novel）」を生み出すことはない。なぜなら、それらは、たんなる事実のつらなりによって構成された時間観で、それを基礎づける「絶対的な秩序」［Mead (1929)1964: 344］は不可能であると、ミードは考えるからだ。

ミードは、この新奇〔新規〕なものが出現する時間について、生物学や進化論に由来する「創発〔性〕（emergence）」という概念で考察をすすめていく。一般的には、創発とは、先行するシステムを構成する諸条件から予測・説明することができない異なるシステムが発生している状態のことをいう。ミードは、先行するシステムを条件としながら現在に新たなものが発生し、それが発生しているシステムと先行するシステム間の相違があることを説明する際に、この概念を使用する [4]。『精神・自我・社会』のなかでは、社会的行為が意識の先行条件であって、それゆえ、「意識は、そのような行動〔ある有機体から他の有機体への順応反応を起こすような行動：引用者〕から生じた創発である」［Mead 1934: 18］と述べ、意識によって行動が起こされるのではなく、むしろ行動によって意識が生じると説明する。

先行条件が、今の意識のような創発物を生み出しているのであれば、そういった創発的なものは先行条件をつぶさに調べることによって知ることができるのではないかという疑問がわく。意識の例でいえば、「意識は発生するべくして発生した。かくかくしかじかの器官が環境の変化に対応し云々」といった固定化した因果の連鎖として理解することが可能であるならば、意識を創発的なものとして理解する必要はないということになる。ミードは、当時の歴史学や科学者たち [5]が、このように考えていることを批判して、次のように反論していく。つまり、先行的な条件を変更不可能（irrevocable）な「真の／客観的な／実在的な過去（real past）」［Mead (1932)1980: 2］[6]として捉えているが、それは間違いなのであって、論理的には逆に創発的なものの発生をもって、それが何ゆえに発生したのかと遡行的に見出されるのだという。過去の必然性や変更不可能性といった性質は、創発的なもの（生じたもの）から発見されるものである［Mead (1929)1964: 353＝2003: 156-7; 2018: 157］。創発的なものが発生しなければ、過去が見出されることはなく、つまり時間が生じることもないのである。

そうであるならば、その創発が生じるロケーションがどこなのかということが問題になる。つぎに、その場所についてのミードの言葉を辿ってみる。

第 5 節　in a present　ひとつの現在のうちに

（1）出来事／社会性／創発

「in a present」の意味を詳細に見る前に、ここでミードの時間論にとって重要な概念である「出来事（event）」と「社会性（sociality）」について概観しておく。まず、出来事概念だが、ミードが影響を受けたホワイトヘッドの定義によれば、「出来事は、二項関係の場であり、・・・延長関係の場である」［Whitehead 1920: 75＝1982: 86］。出来事は自身のうちに他の出来事を含み、同時に他の出来事の一部である。また、このふたつを部分とする出来事があると考えられるから、出来事は連接 junction されているのだと説明する［Whitehead 1920: 76＝1982: 87］。この意味において、出来事は「複合体」［Whitehead 1920: 52＝1982: 61］である。そして、そのような出来事をわれわれが認識できるのは、出来事が「ある時間の幅におけるその場所の特殊な性格」をもっているからである［Whitehead 1920: 52＝1982: 60］。

すでに安川一［1985］によって指摘されているように、ミードはホワイトヘッドを批判的に継承しながら独自の議論を展開させていくのだが、出来事概念をホワイトヘッドとは異なる観点から捉えている。ミードは行為論の文脈でパースペクティヴについて語り、「新奇な（novel）出来事との絶えざる遭遇が強調され、これを起因とする行為構成が問題にされる」［安川 1985: 696］。そのため、ホワイトヘッドの出来事概念にはない創発性概念や新奇なものについて、つまり何かが出現してくる状況を幾度も語りなおす必要があった。ミードは時間論において、新奇なものが出現するその場である現在、新奇なものをとらえるリアリティ、そういったものを語ろうとしていた。

先述のとおり、絶対的な神のごときリアリティを拒絶するなら、リアリティは直接的な経験に関連させるほかはない。しかし、リアリティを直接経験に関連づけてしまう以上、限定的な個人の主観性に閉じ込められるという問題が生じてしまう。「相対性理論」は、ある意味ではそのことを積極的に解決した、とミードは見なしていた。それぞれの主観性は、それぞれのパースペクティヴをもっているが、パースペクティヴは「交差（intersection）」［Mead (1927)1964: 96＝ミード 2003: 96］している。この交差概念自体は、ホワイトヘッドによるものだが、加藤が述べるように、ミード最晩期の「社会性」概念へとつながるもので［ミード 2003: 注 29］、ミード時間論での工夫のひとつである。

ミードは、社会性を「同時に複数の事物である能力（capacity）」［Mead (1932)1980: 49＝2018: 660］と定義している。このことを時間に適用していくと以下のような説明になる。ミードは、過去が現在の条件となり、創発する未来を見出すことのできる現在は、「ある系内部における当の対象の位置は、その対象を、この系以外の別の系の内部においても配置するという認識」［Mead (1932)1980: 63＝2018: 674］が求められるのだという。つまり、現在にある対象が、別の現在においても配置することが可能であると認識することが、「現在の社会性」であるのである。

さらに、「私は創発を社会性の一つの表現とも呼んできた」［Mead (1932)1980: 70＝2018: 679］と語り、「創発自体が新旧両系の特性を同時に持ち合わせて」［Mead (1932)1980: 76＝

2018: 684］おり、このふたつの系に属していること、つまりふたつの系という相違は時間的次元を利用していると説明する。さらに、創発は、先に引用した現在のように、ふたつの系だけでなく、別の系にも属するものであると認識することによって社会性を獲得することになる。このようにして、時間のなかに社会性が導入される。そして、この社会性概念こそが、ミードの命題「リアリティはひとつの現在のうちに現れ出でて在る」を余すことなく受容する概念であるのだ。

「ひとつの現在」と述べられているのは、それ以外の別の現在を示唆するためであり、現在はそれだけで存在するのではないことを述べたものである。現在は、出来事を条件に新たな出来事が創発する場であり、新たな出来事によって現在は過去と未来を境界として存立することが示される。リアリティはそれらの事実性／現実性が表現されたものである。リアリティは、たんに独立した限定的な個人によって直接経験されるものではなく、社会的に理解されるものである。社会性の概念は、そのことを説明する概念であった。

（2）ひとつの現在のうちに

ミードの時間論は、現在を中心にしたものであるが、結論から言えば、上述の創発的なるものが生じる場としての現在が強調されている。ミード自身の時間に関する思考を深化させるために、ホワイトヘッドの概念・用語を頻繁に利用するが、先にも述べたように、その結論に必ずしも賛同するわけではない。それゆえ、ミードは自身と A. N.ホワイトヘッドとの見解の相違を明確にする。

たとえば、もともと心理学に由来する言葉である「見かけの現在（specious present）」をめぐっても二人の結論は異なっている。ホワイトヘッドが最終的に見かけの現在はどこまでも拡張できるとする一方で、ミードが考える「見かけの現在」は幅をもっていても、現在として経験されていることが重視される。なぜなら、ホワイトヘッドのように見かけの現在が際限なく拡大するなら、「過去というものや未来というものを除去することになる」［Mead (1932)1980: 1］からであり、また 2 節で述べたように、現在を極小化してしまうことになってしまうからである。実際、ホワイトヘッドは、最終的に「永遠的客体（eternal objects）」を参照すること、つまり、絶対的実在や絶対的秩序をもち出すことで解決を図ろうとしてしまう。永遠的客体という概念は如何にも難解なものだが、ミードの言わんとしていることは、ここまでの内容で明らかである。つまり、「彼〔ホワイトヘッド：引用者〕は、生成するものの実質〔内容〕を、発生の外部の原理の支配下にある出来事に進入するとしている、『永遠的客体』の世界へと移しかえる」［Mead (1932)1980: 20］と、批判する。ホワイトヘッドの結論では、苦難や災害のような人間に影響を及ぼすさまざまな出来事を、「神意の直接の御業（a direct action of providence）」［Mead (1923)1964: 250］と捉えていた宗教的な信念と大して変わるところがなく、神の真意としてすでに決定していたこととされてしまえば、出来事の現在の性質はなくなってしまう。そうなってしまえば、神の御業としての出来事は、感謝するか忍耐するかによって受け入れられるべきものと解されることになる［Mead

(1923)1964: 250]。しかし、科学的方法が明らかにしたように、この方法を世界理解のために適用することによって、不可避の神の御業と思われた感染症のような病気ですらも、回避することができるようになった［Mead (1923)1964: 250, 254］[7]。「現在進行している事象の何たるかを解明することが、科学の営為」［Mead (1932)1980: 33＝2018: 646］と考えるミードにとっては、これは論理的な帰結であり、現在進行形として現世の出来事を捉えなくてはならないのである。

ミードは、「世界は、いくつもの出来事からなる世界である」［Mead (1932)1980: 1］と述べているが、それらの出来事のすべてが因果の鎖によってつながれたものではなく、それゆえ絶対的な秩序という発想とは無縁であることを説明する。絶対的な存在への参照は、上記でも述べたように、宗教、哲学、科学において行われる。出来事は、そのような秩序や存在によって定義されるものではない。これは、「抽象の不適切な利用」［Mead (1932)1980: 20＝2018: 633］に他ならない。そこで、ミード自身は、出来事を「生成するもの」［Mead (1932)1980: 21］として説明する。

たとえば、それを生命の創発〔発生〕という観点から捉えることができる［Mead (1929)1964: 353＝2018: 158-9］。生命の発生の許容条件となる出来事がある。しかし、生命の発生によって出来事はそのような条件となるのであって、生命発生の以前から条件であったわけではない。このように出来事は、「不断に推移（passage）していく世界」［Mead (1925)1964: 277＝2018: 48］のなかで機能する概念であるが、それが切り詰められた瞬時と同じように見なされてしまえば、「推移」は純粋にそれだけを抜き出して捉えられるものであるかのようになってしまう。推移だけを取り出そうとすれば、時間を細分化して「ある瞬間と別の瞬間を区別する」［Mead (1932)1980: 20＝2018: 632］ことになり、「生成（becoming）」を無視するものとなる。「現在とは、単なる推移の抽象物とは対照的に、一様に推移するリアリティの時間的次元から任意に切り取られた一断片ではない。現在の主たる準拠点は創発的な出来事である。つまり、何ものかの発生途上過程なのであって、この発生過程は、創発的出来事に既に到達し終えた完了状態以上のものであり、さらにいえば、この何ものかの変質や存続あるいは消滅によって、創発なくしてはもちえなかった内容が後の推移に対してつけ加わる過程である」［Mead (1932)1980: 23＝2018: 636］。ミードが論証しようとしているのは、極端に分割された瞬間、現在を切り詰めてしまうことではなく、生成に焦点を絞る[8]ことによって見出される時間構造であり、この時間構造は創発出来事を通じて得られるものだ［Mead (1932)1980: 23＝2018: 636］ということである。

また時間構造を手に入れることによって、過去、現在、未来の時間様態は推移として、観念の作用領域によって精神という場所で捉えられると、ミードは述べる。それゆえ、過去も未来も、言及される現在の観念のうちに存在するということになる［Mead (1932)1980: 24＝2018: 636-7］。過去と未来が存在すると思えるのは、ふたつの時間様態が現在の境界となっているためであり、それ自身がもつ性質ではない。過去と未来は「創発的出来事とその発生場面情況とを条件づける関係によって確定される」［Mead (1932)1980: 24＝2018: 637］時間

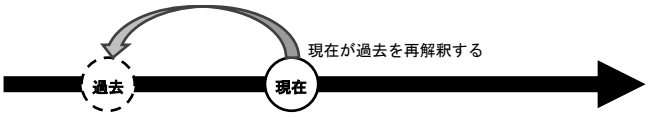
様態であることになる。

第６節　現在の発生とその構造

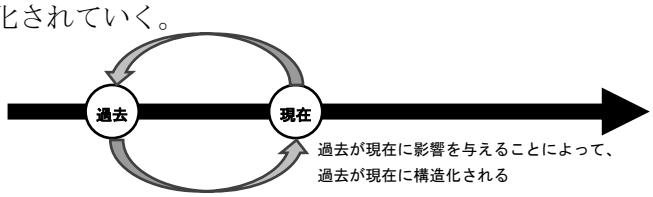
過去・現在・未来の時間の三様態の関係性を、上記までの話も交えながら、誤解を恐れずに要約しておく。リアリティの場としての現在は、過去を条件として出現するのであった。

そのため、イメージでは現在はいまだはっきりした輪郭をもっていない。過去を条件にしうるのは、出来事が他の出来事を部分としてもっているように、現在も過去と部分を共有するからである。しかし、それが異なる時間様態として理解されるのは、条件にした過去とそこから生まれた現在には違いがあるからである。

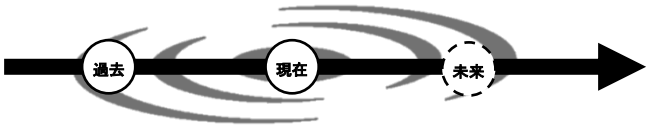
現在が輪郭をもつときには、過去は現在によって吟味に掛けられ再解釈される。過去はそのとき、それまでの過去とは異なるものとして理解されている。



過去は再解釈されることによって、新たな輪郭をもつことになる上に、現在との関係を取り結ぶことで構造化されていく。



ミードはある場所で、「最終的構造は、無時間的なものである。無時間的なという意味は、その構造は完成した構造であって、その完成した構造は、いまやその構造を生じさせた推移とは無関係であるということである」［Mead (1929)1964: 350＝2001: 152］と述べている。つまり、現在が過去とのつながりをもち、現在として認識されるのであれば、奇妙な言い方になるが、現在の時間構造が完成するということになる。その際、過去や現在を条件とする未来は予想されることによって萌芽的に認識され、幅をもった現在のなかに取り込まれている。



リアリティの場としての現在＝「見かけ上の現在」が構成され、過去や現在を
条件として未来が生み出される
この構造化された時間である見かけ上の現在は「時間の幅」をもっている

ただし、先に確認したように、未来は不確定であるため、仮説的なものでしかありえない。また、現在が構造化されてしまえば、それは時間を失うことになってしまう。新奇なものの

出現する余地がなくなってしまうが、現在にはある種の「断絶」があるのであって、そこに新奇なものの「種子」のようなものが内包されている。新奇なものは未来の種子でもあるが、とはいえ未来はやはり不確定なものであり、現在の時間構造を維持するためには、仮説的であっても確固たるものとして予見されていなければならない[9)]。

ここまでのことで明らかなように、過去と未来は「精神のうち」にしか存在できないため、そのリアリティは現在のうちに存在するということになる。ただし、以上の話は、ひとつの視点から語られたものに過ぎない。

構造化された現在どうしが交差する
交差が可能なのは、社会性をもっているからである

ミードが複数のパースペクティヴについて語ることを考慮に入れれば、さまざまな観点から把握された現在があるということである。それらは出来事がそうであったように部分を共有することによって交差している。しかし、これらは統一されていないことが重要である。というのも、「合体する諸現在に、歴史はない」［Mead (1929)1964: 353＝2001: 156］と言っているように、そうなってしまえば無時間的なものにならざるを得なくなる。とはいえ、個別に並列していると考えるなら、ミード自身が批判していた絶対的なリアリティと同じ論理によって無時間的なものとなってしまう。それゆえ、これら諸現在は、他の現在と重なりながら、区別できるという状態にあると考えられるのである。そして、それが可能であるのは、リアリティのある現在においてだけなのである。

そして、このように交差すると考えられるなら、ここには社会性があると見なすことができる。ミードは次のように述べることからも、ここでの説明の妥当性がわかる。「万物世界〔the universe〕の社会的性質は、新奇な出来事が、古い秩序とその先ぶれを到来させる新しい秩序の両方に存在する状況のなかに見られる。社会性とは、同時に複数の事物である能力である」［Mead (1932)1980: 49＝2018: 660］。

第 7 節　おわりに

ミードは、『精神・自我・社会』の付録論文「生物学的個人」のなかで「理性に基づく行動様式は、衝動に基づく行動様式から生ずる」［Mead 1934: 348＝2018: 562］と述べ、動物の延長に人間・人間性があることを示していた。時間についても同じである。自然科学が捉えている時間と人間が歴史として捉える時間は、同じものである以上、それらを統一した論理で解釈できると考えていた。さらに、社会的性質＝社会性は人間の営みにのみ見いだされるものではなく、自然科学の対象とするものにすら見いだせると考えていたことは、ここまで見てきたとおりである。社会を考察するとき、われわれは、動物と人間を区別し、自然と社会を区別することを無意識に行っているが、ミード時間論はそのことの孕む問題点を見事に示している。ミード時間論と向き合うとき、われわれが自明としている時間認識が、身近

であるほどより深遠なものであるということにも、同時に気づかされるのである。

注

1) H.ヨアスは、的確な要約を行っているので、本章の見通しをよくするためにも紹介しておく。「第１回講義では、現在の問題のうちにある過去の構成という考え方が紹介されている。第２回講義においては、生命有機体とその環境との関係の構造のうちにすべての科学が構成されているということを説明することで、相対性理論の『非時間的』結論への反論がなされている。・・・第３回講義では、この議論がさらに進められ、・・・社会性の一般的概念へと展開することに費やされている。・・・第４回講義では、動物と人間社会の社会性のさまざまなレベルのあいだで、また同じように生命有機体とその環境との関係の構造のレベルのあいだでも区別がなされる、進化論の基本概要を示している」［Joas 1985: 170-1］。ただし、『現在の哲学』の編者 A. E. マーフィーの「はしがき」によれば、ケイラス連続講義の第２回講義が分割されて「第２章」と「第３章」を構成していると書かれているので、ヨアスが「第１講義……。第２講義……」と述べているのは、厳密ではない。

2) 2018 年に出版された植木豊訳では、「実在は一齣の今現在というもののうちに存在する」［ミード 2018: 612］となっている。この植木によるミードの邦訳『G・H・ミード著作集成』は、『精神・自我・社会』『現在の哲学』の主要な講義録と主要論文（一部はミードの死後に公表された論文を含む）が訳出されており、ミードの思考をたどる一冊として優れたものとなっている。また、2003 年公刊の加藤一己・宝月誠訳『G.H.ミード プラグマティズムの展開』は、晩期を中心としたミード自身による公表論文とそれに付された丁寧な訳注、さらに思想的背景によってミードの業績を辿った優れた解説が収められており、非常に参考になる。ここで、ミードからの引用について説明を加えておくと、植木訳と加藤・宝月訳とでは重なる論文があるため、引用注は基本的に原文頁数を付し、邦訳を参照した場合のみ邦訳文献の頁数を記載することとする（その際には一部訳語を変更したものがある）。したがって、参考文献表には、「ミード、G. H.」として両翻訳書を明記し、原書の「Mead」の欄に本文内と同様の割注でミードの邦訳に参照できるようにした。

3) B. アダムは、ミードの時間論についても多く言及している。アダムは確かにミード時間論の核心「創発」「社会性」をとらえているが、精神の作用を強調して解釈し、ミードの時間論を主観主義的にとらえる傾向があるように思われる［Adam 1990: 38-42＝1997: 64-71］。

4) ミード自身による創発性の説明は、［Mead (1932)1980: 69＝2018: 678］を参照のこと。また、河合は「創発はたんに新しいものが生じることを意味するのではなく、二つの相違なるシステムに同時に事物が属し、その二つのシステムの間の差異があることを意味する」［河合 2010: 50］と簡潔にまとめている。

5) その代表として特に A.N.ホワイトヘッドの科学哲学で展開している諸論が仮想敵として批判されている。

6) 『現在の哲学』での初出は、“real” past となっており、強調されている。real は多義的であるため、翻訳が困難である。とはいえ、「実在的」とするだけでは、ミードの真意を伝えることが難しいように思われる。というのも、「実在的」という訳では事物の客観性だけが問題であると捉えられる恐れがあり、「真の・本当の」といった意味を見逃してしまう。かといって、宗教や哲学などが問題とする「真の」物事の側面について語られる場合が強調され過ぎても、ミードの問題から離れてしまうだろう。ミードが『現代の哲学』で使用する real には、「客観的」・「真の」というふたつの意味があるということを理解しておく必要がある。

7) ミードは、病院、予防接種、強制隔離などの科学的医療のコミュニティへの適用をあげている［Mead (1923)1964: 255］。

8) ただし、ミードは「というのも現在を特徴づけるのは、その生成と消滅である」［Mead (1932)1980: 1］としており、現在の性質の「生じること」と「滅すること」の両面について考慮している。

9) この段落は、［Mead (1929)1964: 351＝2001: 154］から示唆を受けて筆者が解釈したものである。

文献

入江正勝［1999］「G・H・ミードの時間論における『歴史』の問題」『社会学史研究』21: 101-14。

入不二基義［2020］『現実性の問題』筑摩書房。

小川英司［1992］『G・H・ミードの社会学』いなほ書房。

加藤一己［2003］「解説 ミードにおける自然、社会、科学的方法」『G.H.ミード プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房、257-93 頁。

河合亨［2010］「『自己の構築』の再検討」『ソシオロジ』55(1): 39-54。

近藤敏夫［1990］「G・H・ミードの社会性概念——時間次元の導入」『社会学史研究』12: 111-25。

ミード、G. H.［2003］加藤一己・宝月誠編訳『G・H・ミード プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房。

————［2018］植木豊編訳『G・H・ミード著作集成——プラグマティズム・社会・歴史』作品社。

安川一［1985］「G・H・ミードの社会理論におけるホワイトヘッド自然哲学——パースペクティヴの客観性をめぐって」『一橋論叢』93(5): 137-56。

Adam, B.［1990］*Time and Social Theory*, Cambridge: Polity Press.（伊藤書・磯山甚一訳『時間と社会理論』法政大学出版局、1997 年）

Joas, H. ［1985］*G. H. Mead: A Contemporary Re-examination of his Thought*, translated by R. Mayer, Cambridge: Polity Press.

Mead, G. H.［(1927)1964］"The Objective Reality of Perspective," Proceedings of the Sixth International Congress of Philosophy, edited by Brightman, E. S., in Selected Writings, edited by Reck, A. J., Chicago: University of Chicago Press, 1964, pp. 306-19.［ミード 2003: 93-112］［ミード 2018: 89-106］

――――［(1929)1964］"The Nature of the Past," Essay in Honor of John Dewey, edited by Coss, J., New York: Henry Holt and Co., in Selected Writings, edited by Reck, A. J., Chicago: University of Chicago Press, 1964, pp. 345-54. ［ミード 2003: 145-58］［ミード 2018: 148-58］

――――［1936］*Movements of Thought in the Nineteenth Century*, edited by M. H. Moore, Chicago: The University of Chicago Press.（魚津郁夫・小柳正弘訳『西洋近代思想史――十九世紀の思想のうごき 上・下』講談社、1994 年。）

――――［(1932)1980］*The Philosophy of the Present*, edited by Murphy, A. E., Chicago: University of Chicago Press.（植木豊訳「現在というものの哲学」『G・H・ミード著作集成――プラグマティズム・社会・歴史』作品社、2018 年、603-97 頁）。

――――［1934］*Mind, Self and Society*, edited by Morris, C. W., Chicago: University of Chicago Press.

――――［1964］*Selected Writings*, edited by Reck, A. J., Chicago: University of Chicago Press.

Whitehead, A. N.［1920］ *The Concept of Nature*, Cambridge: Cambridge University Press.（藤川吉美訳『ホワイトヘッド著作集第 4 巻 自然という概念』松籟社、1982 年。）